

## 議論の意味を考えよう

理事長 廣 田 勇

ここ数年、気象学会の春秋の大会における参加者の数が増え、研究発表の場における議論が活発に行われているのは喜ばしい限りです。特に、若手研究者達がそれぞれ新しいテーマに取り組んでいる姿を見聞すると気象学の発展に明るい未来を感じます。

そのような議論の意義をさらに深めるため、ここでは「研究の場で議論すること」の持つ意味内容をあらためて考え直してみたいと思います。

春季秋季に開かれる「大会」の第一の目的は、文字どおり「大勢が一堂に会する」ことにあり、英語で言えば Assembly (集会) あるいは Meeting (会合) ということになりましょう。問題は、集まって何を行うかです。総会での議決や通常の発表セッションだけでなく、久し振りに会う遠隔地の仕事仲間とロビーや懇親会のような場所で語り合うこともその中に含まれません。

ところが、そのように大勢が集まった場で行われる議論の内容には、かなり質的に異なった二つの色合いのあることに気が付きます。

そのひとつは、個々の研究テーマに則した極めて具体的な質疑応答、議論のやりとりです。たとえば、いわゆる数値モデルについて、差分格子の取り方、拡散係数や摩擦係数の決め方、境界条件の与え方など、或いは、衛星観測についていうなら測器の仕様や測定精度、信号処理のアルゴリズム等々を詳細に亘って議論することがそれに当たります。

これは、その問題を実際に手がけている人達、つまり専門家の集団の中で成り立つ議論です。従ってそのような場ではかなり特殊な術語も詳しい説明ぬきで相互に通じ合います。

このようないわば高度に技術的な内容の議論を主目的とする場は Workshop と呼ばれます。Workshop の本来の意味は、たとえば焼き物 (陶磁器) を作る工場のことです。そこでの議論は、使う粘土とか轆轤の回し

方とか、或いは釉薬の掛け方や窯の温度など、まさに良い焼き物を如何にして作るかの技術的な切磋琢磨が目的です。これはこれで極めて重要な場であることに間違いありません。科学の研究に当てはめれば、いわゆるプロジェクト (問題解決型の目的研究) ではこの種の議論が中心になります。多少ニュアンスは異なりますが、似たような言葉で Conference というのも、その原義は「テキストの相互比較」ですから同類と言えるでしょう。

これに對しもうひとつの議論のありかたは、あるひとつの大きな問題について、その歴史的背景から問題設定の位置づけ、さらには将来への発展などに関し想像力・創造性を発揮した自由な議論を参加者それぞれの立場から語り合うことです。これは Symposium と呼ばれます。

辞書を見ると Symposium の第一義は Drinking Party とありますから、まさにギリシャ時代さながらに大勢が車座になって葡萄酒でも飲み交わしながら互いの哲学を論じあうことを意味します。事実、英国のオックスフォードにあるアッシュモリアン博物館にはクレタ島出土の壺がたくさん展示してありますが、その棚のひとつの表示板に The Symposium と書いてあって酒を盛る器や杯が並べてあります。

研究の場においても、Workshop における技術的な議論とは別に、このような思想性を重視する討論の場が極めて重要な意味を持っています。問題解決型の議論では考えるタイムスパンが比較的短いのに対し、問題提起型の Symposium ではより長い時間スケールで見た議論が中心となるのも特徴のひとつに挙げられます。

最近学会員になられた方々はあるいほご存知ないかも知れませんが、現在の気象学会堀内賞の基金をご寄贈下さった堀内剛二氏が、天気15巻 (1968) 12月号の中でその年の春に東京で開かれた COSPAR 総会に関連して Symposium のもつ意義を氏一流の名文で強調しておられます。堀内氏は、当時の気象学会にあって、

いわゆる中心的テーマから一步離れた立場で気象学の将来を見据えておられた方です。堀内氏のご功績である超高層物理学の開拓は、必ずしも当時の時流に乗ったものではありませんでしたが、それから30年以上も経った現在の中層大気物理学（および大気化学）の発展を正しく見通しておられました。気象学会堀内賞の設定はまさにその御遺志を継いでいるものです。

ひるがえって考えて見ますと、作今の気象学における議論のあり方が、ややもすれば既成の土俵上での最新の技術的側面に偏り、じっくり腰を据えて問題のあり方を考えるような思想性に富んだ議論が少ないように思われるのは、単に私の偏見に過ぎないのでしょうか。

大会・集会における Symposium の意義は、必ずしも大勢の人数の集まることが条件とは限りません。二人だけの1対1の議論でも成り立つはずですし、もっと極端には、自分ひとりの心のなかで「対話」を行う哲学的思考行為があっても良い、いや、なければならぬと思います。そのような日常の自己研鑽を踏まえてこそ、集会の場での実りある討論が成り立つとしたものでしょう。

上に述べたことは口頭での議論のみならず、論文やテキストという形での著作についても全く同様に当てはまります。各種学会誌（ジャーナル）に投稿・発表される論文にも、観測事実や計算結果を詳細かつ客観

的に記載した「報告書」的な色彩の濃いものと、結果の解釈や問題提起を中心にした論調の強いものがあります。もちろん、研究の進展にとってその両方が必要であることは言うまでもありませんし、両者の間に価値の上下をつけるような事柄でもありませんが、論文を書く側、読む側の双方とも、その質的な差異を意識することは常に必要でしょう。昨年春に出版した拙著「気象解析学」の中で、気象学に限らず一般に理論と呼ばれるものには「定理応用型」と「概念提起型」のふたつの色合いがあると述べたのもこれと殆ど同じ趣旨です。

西暦の年号にさしたる意味があるとは思いませんが、今年2000年は20世紀最後の年に当たります。ひとつの時代の節目としての新しい世紀を迎えるにあたり、これからの気象学の発展を考えるためには、思想性豊かな議論が学会の場で大いに展開されることを期待したいものです。特に、次世代の気象学を担う中堅若手の諸氏には、飽和感・逼塞感を打破するような新しい議論の展開を自らの手で作り出して行く意欲を持ち続けてもらいたいものと強く念願する次第です。

#### 参 考 文 献

- 堀内剛二, 1968: 上部成層圏と中間圏に関するシンポジウムについて, 天気, 15, 524-531.